

NWEC（国立女性教育会館）男女共同参画推進フォーラム参加報告 CSW インターン企画「ユースが語るジェンダー平等の壁『・・・らしさ』とは」

次世代支援プロジェクトリーダー・日本BPW 連合会財務委員長 林 智意
ワークショップ進行役・日本BPW 連合会ヤング委員長 ニノ宮 寛子

国連女性の地位委員会（UN-CSW）に派遣されたインターンが帰国後、国内で取り組むイベントの一つにNWEC インターン企画があります。しかし、2020年度のインターンはUN-CSWが限定的に開催されたため、NYへの渡航も、会議等への参加も叶いませんでした。また、NWEC男女共同参画フォーラムもオンラインで開催されることになりました。NYでの体験の代わりに、何かインターンとイベントができないか、と話し合っているうちにそれぞれが持っているジェンダーへの興味のある分野について話し合った結果、「アンコンシャス・バイアス」という共通のキーワードが見えてきました。そこで、例年のUN-CSW参加報告代えて、3名のスピーチとそれに関するグループセッションで構成したワークショップを実施することになりました。各インターンが何に興味を持ち、今後どんな活動をしたいのかについて、NWECでのワークショップの最後には、各自のセッションを通して湧き上がった宣言と、参加したインターンOGからの感想も含めて、インターン3名による報告を掲載します。

◆概要

1. 実施日時: 2020年9月12日(土)
13:00~15:30
2. 様式: オンライン会議 (Zoom上)
3. 企画およびスピーカー: 津久井 瞳、横井 桃子、
西岡 真由美 (発表順)
いずれもBPW派遣CSW64(2020)インターン
3. テーマ「ユースが語るジェンダー平等の
『・・・らしさ』とは」
4. 参加人数 27名
5. プログラム
- ◇主旨説明(4分)
- ◇グループセッション1(23分)
- ◇スピーカーによる発表(60分)
~休憩(5分)~
- ◇質疑応答&スピーカーによる意見交換(20分)
- ◇グループセッション2(20分)
- ◇まとめと閉会(18分)

したグループセッション1では、参加者がこれまでどんな不平等感を体験し、そこにはどんなアンコンシャス・バイアス（無意識の偏見）があったかを、例も挙げながら討議した。

2)スピーチ

津久井 瞳:『エッセンシャルワークと「・・・らしさ」』

このテーマに内在するアンコンシャス・バイアスについて発表した。このテーマに関心を持った理由の一つは、大学でジェンダー論を専攻しており、雇用におけるジェンダー格差の問題に興味があったからである。エッセンシャルワークに分類される職業は女性比率が高く、賃金も抑えられている傾向があり、ジェンダーの視点からこの問題を見てみたいと思った。二つ目は、自身が歯科医院で助手のアルバイトをする中で、「おかしい」と感じる瞬間についてそれを共有し、身近なアンコンシャス・バイアスを考えるきっかけにしたいと考えた。アルバイトで体験した2つのエピソードを軸に、雇用におけるジェンダーの偏りや賃金構造、コロナ禍で増えた負担などをデータと共に紹介し、最後には制度面、すなわち待遇改善、そして、文化・環境面でのアンコンシャス・バイアスを解くという提言をした。そのためには一人一人が、日常的にアンテナを張って気づくこと、そして無意識に「〇〇らしさ」を押し付けたり、縛られたりしていないか考えることが重要ではないかと結んだ。イベントは和やかで、それでいてエネルギーにあふれていた。日常で感じるもやもやを受け止めあい、共感しあうことで、お互いに励ましあうことができた。ユースからの提言をテーマにしたが、むしろ私自身が、他のスピーカーや参加者から勇気をもらった。他の2人の発表から

令和2年度「男女共同参画推進フォーラム NWEC主催」ワークショップ
ユースが語るジェンダー平等の壁
「・・・らしさ」とは

<p>9月12日(土) 13時~15時半</p> <p>開催場所: zoom (リンクは参加登録された方のみを送らせていただきます)</p> <p>主催: 認定NPO法人日本BPW連合会 http://www.bpw-japan.jp/</p> <p>参加申し込み↓(先着40名)</p> <p>QRコードから登録したのち、8/27以降に https://bit.ly/33jn1je e (NWEC公式ウェブサイト) から参加登録を完了することができます。</p>	<p>プログラム</p> <p>1. グループセッション アンコンシャス・バイアスの視点から、経験してきた不平等について共有</p> <p>2. トークセッション ・「男らしさ」と「弱さ」・ケアについて ・エッセンシャルワークと「・・・らしさ」 ・性的同意とアンコンシャス・バイアス</p> <p>3. グループセッション ジェンダー平等に立ちあがる壁にどう行動できるか?</p>	<p>スピーカー</p> <p>津久井 瞳 (写真左側) 東京外国語大学 国際社会学部 現代世界論 コース4年インターン論ゼミ所属</p> <p>横井 桃子 (写真中央) 上智大学総合グローバル(法学部) 学生団体 Speak Up Sophia創設者</p> <p>西岡 真由美 (写真右側) 京都大学大学院 教育学研究科 臨床心理学 講座 博士後期課程2年</p>
---	--	---

◆報告

- 1) 主旨説明: “アンコンシャス・バイアス” について説明し、各スピーカーをファシリテータと

は、一見違うテーマでも、アンコンシャス・バイアスの底の部分では、深くつながっていることを学んだ。お互いの問題意識を話した準備ミーティングのときから刺激を受け、当日のグループセッションでも熱を感じた。年代的には上の参加者から、日頃の問題意識と対処するヒントをいただき、実りの多いものだった。ジェンダーの格差の根深さに気づくと打ちのめされそうになるが、今回出会えた人々のように、自信をもって行動していきたいと強く感じた。

横井桃子：『アンコンシャス・バイアスから考える性的同意』 大学で性的同意を広める活動をしてきた経験、私がフェミニストになった理由、性的同意について、そしてアンコンシャス・バイアスと性的同意という視点から発表をした。性的同意の大切さと同意とは何かという事を、まず伝えなかった。性的同意について話すと、「同意とは契約書を書かなければいけないのか」、「同意を取ったらムードが崩れてしまうのではないか」という声をよく聞かすが、それは十人十色である。性的同意をより身近に感じてもらうために、アンコンシャス・バイアスの例を交えながら大切さを説明し、また性的同意についてより詳しく知ってもらえるよう、必要な条件についても紹介した。次に伝えなかったのが、私たちの中に存在する偏見に目を向けて自分の価値観をアップデートしていくことの大切さである。アンコンシャス・バイアスが、性暴力の被害者を責めるようなセカンドレイプの発言に繋がってしまうことなどについて話し、参加者と一緒に自分自身の偏見などと向き合うきっかけを作ることができた。

ワークショップで、最も印象に残ったのは、幅広い年齢の参加者と実際にディスカッションをしたことで、異なる年代でも似たような経験をしていたり、時代とともに社会も変化しているようでも、ジェンダーに基づく差別は日本社会では、まだ非常に根強いのだと改めて感じたことである。小学生の参加者と一緒に話す中で、次世代のためにも現状を変え、ジェンダー平等の達成を目指していかなければいけないと強く感じた。中学生になった頃、痴漢被害に遭う友人が周りに増え、気をつけているつもりなのに学校の先生に女子だけが注意喚起をされることに違和感を覚えた事を思い出した。最後に、上智大学で行ってきた性的同意を広める活動について説明する機会もあり、興味を持つ方がいることを嬉しく感じた。

大学を卒業し、団体の代表は卒業したが、後輩たちがさらに周知活動できるよう、私自身ができることをしていこうと思った。また、常にジェンダー平等達成のために何ができるか、考えて行動をしていこうと強く感じた。

西岡真由美：『「男らしさ」と“弱さ”・ケアについて』

大学院で臨床心理学を学ぶ傍ら、性暴力被害者ワンストップセンターで活動しているが、その中で“弱さ”を見せることやケアをすることは「男らしくない」というアンコンシャス・バイアスがあるのではないかと、そこに着目しない限り、皆生きにくいままになるのではないかと、という問題意識を持つに至り、「『男らしさ』と“弱さ”・ケアについて」という視点で発表した。修士論文でテーマにとりあげた男性の性暴力においては、ジェンダーをめぐるアンコンシャス・バイアスが顕著に出ている。性暴力については「男性が性被害に遭うはずがない」「男性が被害を受けても抵抗できるはずだ」などの偏見が社会にあるが、実際には性的な被害体験を持つ若年男性は20~30%、レイプ相当の被害を受けた男性は0.4~1.5%存在する。また、最近になって少年の被害は注目されはじめているが、成人の被害はほとんど外に出てこない。しかし、男性は援助要請をし難い現実がある。支援機関の中には「女性」を対象としているところが多く、「いたずら電話」と思われて理解されないこともある。社会の無理解が男性被害者を孤立させている面も大きい。男性の性暴力被害については、このような特殊な事情があるが、「男らしさ」を相談をすることについて考えた場合、「弱音を吐くな」「感情を表に出すな」などの男性に求められている社会規範ゆえに相談しにくいという一面もある。「男らしさ」は、「力・権力・所有」、「勝つー負ける」、「支配ー被支配」というような特性を強く持つ。

次に「ケア」について考える。いのちのサイクルがその人なりにうまく循環するように、食べたり、休んだり、身ぎれいにしたり、環境を整えることや、気持ちを安全な方法で吐き出すことは生きる上で必須のことである。また、社会においては共存のためお互いを思い合ったり、ケアをしあったりする。このように、生きていくためには自身のケア・他者のケア・関係性のケアが必須である。ただ、男性性の本質を前述のように捉えたと、ケアの必要な自分は弱い自分として受け入れ難いかもしれないし、「男性」的価値観が優位な場ではケアの必要性そのものを否定する傾向もある。また、自身の“弱み”を見せることは、何としても避けなければならないことにもなるだろう。

しかし、若松英輔氏*が言うように、弱みを見せないことは強がりであって、真の強さではない。また、「弱さ」こそが、他人との信頼を深める契機であり、未知なる自己と出会うための扉にもなり得る。苦しさや不安、寂しさや恐怖、生きづらさなどを行動で表現したり、他者を攻撃することで正当化するのではなく、言語化し、対話を持ち、ともに解決策を考えたり抱えたりできる社会を作っていきたい。また、性に関係なく、他者・自身・関係性のケアの必要性を正面から見据え、ケアをきちんと内包した生活設計・社会システム設計をする必要がある。そのために、まず長時間労働の削減や、ワークライフバランスの考慮を行う必要があるだろう。また、性に関係なく・偏見なく相談できるような体制と環境を整えることも急務である。

*東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授。著書「弱さのちから」。他に『14歳の教室 どう読み どう生きるか』など。

3) グループセッション 2

スピーチの感想や私だったらどうするか、について各グループでスピーカーが再びファシリテータをし、ディスカッションを行った。全体のまとめでは、個人の特定ができないように話すという約束で、個人的な体験について話してもらった。その後、3人のスピーカーが意見交換を行なった。

◆成果:各スピーカーがワークショップを通して感じた「私たちの行動宣言」として発表した。(下段枠内)

◇参加者の感想

<BPW 個人会員>

藤田(匿名)典子(CSW インターン 1 期生)

素晴らしいイベントでした。テーマがとても身近で、そして「ユースの語り」ということで参加以前からワクワク感が止まらなかったのですが、当日は時間を忘れて

とても楽しい時間を過ごさせてもらいました。

まず「アンコンシャス・バイアス」は、自分の経験に照らし合わせてずっと関心を持っていたテーマでした。私自身も、他者との会話の中で事実とは異なる認識をされ、困ったり、複雑な気持ちになったことが(何度も)あるからです。つい最近もこんなことが。「以前駐在でイギリスにいました」と言えば、「旦那さんについて? 良いわね!」と返されます。「いえ、自分の転勤で。大変でした。」と答えると、相手の方は絶句(というより“???”という感じ)になり、「すごいですね!」と言って立ち去ってしまいました。こういう体験の度に私自身、「女の役割」や「らしさ」について考え、省察してきました。本イベントではグループセッションの中で、このような自分の体験を紹介する機会があり、参加者の方々に地域や世代を超えて共感してもらい、とてもありがたく、嬉しい体験となりました。

次に、今回のメインテーマであった「ユースの語り」における発表および議論が、大変意義深かったと思います。「ケア」や「エッセンシャルワーク」の現場でのジェンダーバイアスとジェンダー役割の押し付けへの疑問、またジェンダーを意識した「性的同意」の重要性の訴え。どれも現代の重大かつ根の深いジェンダー的課題だと思いますし、発表者が指摘したように、コロナ禍で一気に噴き出した問題でもあります。こういった課題について、with コロナの今から議論し、解決策を打ち出し、そして post コロナ社会での男女共同参画の実現に向けて努力することが、今の私たちの重要な役割だとひしひしと感じました。発表者のCSW インターン生のみならず、素晴らしいご報告をありがとうございました。みなさんも、このご経験を一つの通過点として今後も大活躍されることをお祈りしています。

私たちの行動宣言

○私はすべての個人の権利が尊重されるために、性的同意について教育する機会を増やしていきます。性的同意は、自分と周りの人を尊重し健全な関係性を作る上で非常に大切な考え方です。大学だけでなく、中学や高校でも学ぶ機会が増えるような取り組みを行っていきます。

○私は「〇〇らしさ」や「こうであるべき」という言葉で、自分を縛らずに、まずは自分に自信をつけていきます。そして、性別や世代などの差異に関わらず、周りの人とお互いを理解しあうコミュニケーションを重ねていきます。このような日常の小さな積み重ねで、アンコンシャス・バイアスの呪縛を解いていきます。

○私は、自身の持っているアンコンシャス・バイアスに意識的になり、性に関係なく皆が生きやすい社会をともに作っていきます。そのために、自身・他者・関係性のケアの必要性を認識し、お互いを傷つけない方法で自身や他者の“弱さ”を出して補い合える関係性を作っていく、社会にも働きかけていきます。

2020 年度 NVEC 男女共同参画推進フォーラム 日本 BPW 連合会ユース企画担当一同
津久井瞳、横井桃子、西岡真由美